

終戦前後の高女部(二)

― 県関係公文書に見る ―

小 松 八 郎

資料(六) 解説補遺

『学院史料』第一号に掲げた資料内については、『尼崎市史』に左の記事が見られ、参考のために転記する。

「十九年五月、県の教学課は特高・労政課と協力して、『生産能率^{そが}阻碍ノ思想的原因ノ調査』を実施し、川西航空・神戸製鋼・大日本セルロイド・郡是産業・住友プロペラ・日本国際航空などの工場において、とくに『学徒ノ時局認識・勤労状況・心理状態等ニ関シ十八ヶ条ノ問題ヲ提示シ、約三千ノ解答ヲ統計調査研究』し、動員学徒の思想指導のための対策委員会を設けた……」(昭和十九年度兵庫県教学課「事務報告」^①)

資料(七)

学校職員生徒罹災状況報告

六月七日迄ノ敵襲ニ於テ本校ニ奉安スル御真影、教育勅語並ニ校舎ニ何等ノ被害無之候間此段及御報告候也

尚 職員生徒ニ関スル被害状況別紙ノ通り及御報告候也

別紙

六月五日ノ爆撃(六月七日夜マデニ判明ノ分)

職員三名 家屋全焼

教諭 渡部 保信 武庫郡本山村田中

教諭 湯川 静子 武庫郡魚崎町

教諭 中部よし子 武庫郡本山村田中第三町内会

生徒二十七名 家屋全焼

生徒一名 死亡 (一家焼死)

一年 神戸市生田区中山手通

生徒一名 行方不明

三年 武庫郡郡家字下り

右の文書は昭和二十年六月八日付で県内政部長宛に報告されたものである。

行方不明と報告された三年生はその後、焼死と判明。なお、『神戸女学院百年史 総説』では、とあるが、誤りである。^②

資料(八)

空襲被害状況報告

以上

本日(六月十五日)ノ空襲ニヨリ別紙ノ通り輕微ナル被害有之候ニ付此段及御報告候也

別紙

被害状況

一、被害場所 神戸女学院専門学校理科館付属建物(理学館西側洗濯教室一棟)

一、被害程度 右一棟建坪五拾坪全焼

右ハ焼夷弾ノ命中ニヨルモノ

一、奉安殿、教育勅語謄本ニハ何等異状ナシ

一、高等女学部建物ニハ何等被害ナシ

一、其ノ他、同窓会館ノ壁際ニ大型焼夷弾一発落下シ、窓ガラスヲ破壊ス、消火ニツトメ大事ニ到ラズ

運動場ニ大型焼夷弾一発落下セルモ被害ナシ

右は昭和二十年六月十五日付にて同じく県内政部長宛に報告されたものである。

以上

資料(九)

学校罹災報告

一、罹災時日 昭和二十年八月六日早晩

一、御真影(御奉遷中)、勅語謄本ニ異状ナシ

一、罹災家屋 神戸女学院専門学校文学館一棟

一、罹災状況

当朝一時頃焼夷弾右建物ノ屋根ニ落下直チニ発見セルモ屋根高クシテ登ルコト能ハズ、屋根裏一帯ニ延焼ス、幸ニ建物全体鉄筋コンクリート建ナリシタメ屋根ヲ全焼セルノミニテ延焼ヲ免ル、宿直員、寄宿舍全生徒、会社宿直員等消火ニ努力ス、他ニ大ナル被害ナシ

以上

右は昭和二十年八月六日付にて県内政部長宛に報告されたものである。

資料十

生徒罹災疎開転学ニ関スル報告ノ件

標記ノ件ニ関シ別紙ノ通り及御報告候也

別紙

罹災疎開ニ依ル転学状況(七月二十日現在)

| 学年 | 県内 | 県外 | 計 | 転学ノ理由 | 備考 |
|-----|----|----|----|---------|---|
| 一年 | 二 | 二 | 二 | 罹災若クハ疎開 | 県外転校者 愛知三、岡山八、福岡二、島根一、高知一、京都五、岐阜四、長野三、 |
| 二年 | 四 | 一 | 二〇 | ノタメ家庭ノ根 | 福井五、広島三、新潟五、三重一、 |
| 三年 | 一 | 三 | 一四 | 軸者タルベキモ | 滋賀四、奈良二、満州一、宮崎一、 |
| 四年 | 六 | 六 | 六 | ノ若クハ病弱者 | 茨城一、石川一、和歌山一、富山一、 |
| 専攻科 | 一 | 五 | 六 | ノミ許可ス | 山形二、熊本二、徳島一、群馬二、 |
| 総計 | 六 | 六二 | 六八 | | 埼玉一、宮城一、 計 六二 |

この文書は昭和二十年七月二十一日付の県内政部長宛に報告されたものである。

資料(十一)

学校在学者中罹災者数調査ニ関スル件

標記ノ件ニ関シ左記ノ通り及回答候也

| 在籍者数 | 一年 | 二年 | 三年 | 四年 | 計 |
|------|------|------|------|------|------|
| | 一三七名 | 一三六名 | 一一九名 | 一三六名 | 五二八名 |
| 罹災者数 | 九名 | 十二名 | 三十名 | 三十名 | 八十一名 |

右は終戦後の昭和二十年十月八日付で県内政部長に報告されたものである。

解説

学院被災の経緯

西宮市は前後五回にわたって大規模な空襲を受け、市街地のほとんど大部分を焼失し、次ページの表のような損害をだした。^⑤

資料(4)は、六月五日の第二回空襲に関する報告書である。この日は、第一回の五月十一日と同じく、神戸大空襲の日だった。B 29 約三五〇機が午前七時ごろから一〇機ないし三〇機の編隊をもって紀伊水道から阪神地区に侵入し、焼夷弾攻撃を加えた。学院校舎の被災はなかったが、別紙報告に見る如く、在校生堀原美年子、高橋百合子の死は特

西 宮 市 の 戦 災

| 空襲 月日 | 投 弾 種 類 | 人 的 被 害 | | | 物 的 被 害 | | | | 罹 災 者 数 |
|-------------|------------|--------------|----------------|-------|--------------------|--------------|----------------|----------------|------------|
| | | 死 亡 | 重 傷 | 軽 傷 | 全 焼 | 半 焼 | 全 壊 | 半 壊 | |
| 5.11 | 爆 弾 | 85 | 100 | 150 | 19 | 3 | 185 | 220 | 2,580 |
| 6. 5 | 焼夷弾 | 30 | 60 | 130 | 1,207 | 28 | 1 | 3 | 4,979 |
| 6.15 | 焼夷弾 | 10 | 43 | 60 | 308 | 32 | — | 12 | 1,336 |
| 7.24 | 爆 弾 | 27 | 30 | 30 | 5 | 2 | 98 | 150 | 1,036 |
| 8. 5 ～ 6 | 焼夷弾 爆 弾 | 485 | 650 | 1,100 | 13,464 | 86 | 5 | 25 | 56,591 |
| 計 | | 637 (872) | 883 (1,800) | 1,470 | 15,003 (17,946) | 151 (902) | 289 (1,086) | 410 (1,504) | 66,522 |

昭和22年「市勢要覧草稿」による。各種の統計によって計数の差異がいちじるしい。

()内は経済安定本部「太平洋戦争による我国の被害総合報告書」(昭和24年4月)による。

に痛恨の極みである。

資料(ハ)は、六月十五日の第三回空襲に関する報告書である。B 29約一〇機が少数の小型機をとめない、約一時間にわたって大阪周辺の空襲と同時に進んだ。この時洗濯教室一棟が全焼した。

第四回空襲は七月二十四日で、B 29と小型機との計一五〇機による爆撃と機銃掃射だった。投下した爆弾はおよそ六〇〇発。その主たる目標が川西航空機宝塚工場にあったので、この集中爆撃の震動と爆風が岡田山まで波及して壕内にいた人びとを恐怖に陥れた。^④

この工場にも学徒動員令のもとに、多くの学生・生徒が動員され、学院も高女部第五学年生五〇名が昭和十九年四月十八日より出勤していたが、^⑤この空襲に先立つ七月初めに高女部生はたまたま工場の旋盤機械を甲陽園の山中に疎開させる作業に従事、その後は学院にひきあげていて危うく難を免れたとのことである。^⑦

資料(ロ)は、八月五日夜半から六日未明にかけての第五回空襲に関する報告書である。終戦わずか一〇日前のことである。B 29約一三〇機が焼夷弾と爆撃の雨を降らせた最大規模の攻撃であった。恐怖の一夜があげると、西宮の南部市域は全滅し焦土と化していた。学院校舎も文学館一棟が罹災した。

以上の五回にわたる空襲にもかかわらず、幸にして学院校舎の被災は少なかったといえるが、この空襲についての思い出を当時学院総務課に在職中の淀 三郎氏は次の如く語られている。

「戦火激烈となるや如何にして学院とそして重要書類を空襲から守ることが出来るかと不安の毎日でした、空襲警報が発令される度に総務部長室に集められて待機したもので、ゲートルをつけたまま寝たことが何カ月か続きましたが、昭和二十年六月には洗濯教室を空襲で焼かれ、その他同窓会館の底も燃えましたがこれは消し止めました。同年八月六日には音楽学部前の山林と資材を、その時の一発が文学館の屋根を貫き炎上しましたが消火の水も無く、西宮市の南半分が焼けている時だけに消防車が来る筈もなく、防火用具といえは手押ポンプ二台と、バケツ、砂袋のみ、真夜中に炎々と燃える建物を見て涙が出るばかりで只茫然と右往左往するのみ、この時、燃えさかる文学館の二階に上って行ったら、数人の女子挺身隊の方が吹き込む火炎に向って懸命にバケツで水をかけておりまして、これがため文学館の内部を焼かずに助かったのだと思います。消火の水のみならず、電力不足で停電の度に幾日も断水が続き飲料水にも困り、水洗トイレの不便さにも嘆いたものであります。」

資料(+)、(+)は生徒罹災に関する報告書である。疎開による県外転校者の数、及び罹災者数の多さが目立つ。特に、(+)において罹災者の在籍者数に対する割合は、一五パーセント強を占めている。なお、本調査に於ける罹災者とは県通牒によれば「戦時中旧住所又ハ現住所ニ於テ衣類、身廻品等ヲ焼失シ特ニ優先補給ヲ要スルト認メラル者ヲイフ」とある。

註

- ① 『尼崎市史 第三巻』七二一ページ。
- ② 『神戸女学院百年史 総説』二七三ページ。

③『西宮市史 第三卷』五一五ページ。

なお、以下記述する空襲の概要は、『同市史 同巻』、及び『日本の空襲 第六卷 近畿篇』を参照した。

④『神戸女学院百年史 総説』二六四ページ。

⑤神戸女学院週報第九八五号。

⑥昭和二十年四月より専門部生となったが、引き続き同工場に動員されていた。

⑦高女部第六二回生、氏よりの聞き書きによる。

⑧神戸女学院「学報」第六一号、「戦中戦後の女学院―総務の窓から―」。

和島芳男著『神戸女学院八十年史』が語る

今次大戦末期の学院

―第四章敷地建物 第三節岡田山―

(略)二十年には図書館も海軍監督官事務所になった。(略)学院が自由に使えるのは総務館だけであった。講堂さえ工場にしようという要求があったが院長はもちろんこれを拒否した。ソール記念礼拝堂には各教室から運び出した机やいすが積上げてあった。そうしておかなければこれも徴用されたのである。善美を尽した校舎が日々荒廃するのは教職員の胸を痛くした。ただ院内各工場で作業するのが愛する教え子であるが故にわずかに慰められた。

学院では防空ごうの築造を急がなかった。空襲のとき多数の生徒を不完全なごうに入れるよりも堅牢な校舎内で適当に伏せさせた方が無難だという説もあった。警報発令とともに

生徒が敏速に校庭の樹間に退避する練習もしてみた。しかし空襲の激化はこういう樂觀を許さなかった。そこで運動場の芝生をはがし、二十人ほど収容するごうをならべた。昭和二十年には阪神間も爆撃をまぬかれないことがはっきりした。浅いごうでは機銃掃射のときにも不安であった。そこで高等女学部裏の谷間に横穴式のごうを掘った。御真影は警報発令ごとに音楽館に奉遷したが、この年他の諸学校の御真影とともに県下川辺郡六瀬村大島国民学校に疎開した。川西会社は校舎の外壁を黒く塗りつぶすことをしきりに希望した。しかし院長は今さらそんな事をしても同じだという海軍監督官の説に従って実施を見合せた。種々の工場を収容した学院が無事でもうとは誰も思わなかった。(略)しかし三回にわたる戦災にもかかわらず学院内では教職員生徒中に負傷者さえ出さなかったのはまことに幸であった。

(二六六、七ページ)